

8303 ビルの谷間は暗い。

ビルの谷間は暗い。

男は空を見あげながらトボトボと歩いた。空には星ひとつなく、重く垂れこめた雲が遠いネオンの光を受けて、かすかに赤く染まっている。

時刻は午前三時過ぎ。都会が一番ひっそりと静まるときだ。もう酔っぱらいの姿もない。カタリと音をたて、ゴミ・バケツをあさっていた野犬が逃げていく。始発の電車が走り出すまでには、まだもう少し時間があった。

阿刀田 高『男と女の物語』

〔許容訳例〕

The valley between the buildings was dark.

The man trudged along looking up at the sky. No stars were in the sky, and the heavy, low-hanging clouds were slightly tinged with red by the distant light of the neon sign.

It was after three in the morning, the quietest time, hour when all is hushed in the city. Even the drunks were no more. With a clatter, and a stray dog, which had been searching the garbage pails for food, ran away. There was a little more time before the first trains started.

〔翻訳例〕

It was dark down between the tall buildings.

Trudging along, the man gazed up at the sky. It was devoid of stars and the heavy, low-hanging clouds were tinged a faint red by the distant light of the neon signs.

It was past three in the morning, the hour when the city lies at its silent and most hushed. Not even a drunk in sight. A sudden clatter, and a stray dog that had been foraging among the garbage pails scuttled away. There was still a while to go before the first trains started.

■ビルの谷間は暗い。(8303)

★「ビルの谷間」は、日本語では熟した表現としてよく使われますが、英語には対応する表現はありません。よく似た表現として *canyon* という言葉がありますが、これも「谷間」という感じではなく「高層ビルが乱立している」という感じで、*skyscraper canyon* と使います。ここでは日本語のまま *the valley between the buildings* にするか、直訳ではありませんがこの状況を英語にするなら *It was dark down between the tall buildings*. でしょう。

★「暗い」は *dark* でしょう。ただ、日本語では、現実の時間と関係を無視して「暗い」という表現も許されますが、英語では許されません。過去時制にして *was dark* です。

■男は空を見あげながらトボトボと歩いた。(8303)

◆「了解要請の the」

「男は・・・」の「男」ですが、「犬が迷いこんできた。(8205)」のところで説明したように、これは、特に隨筆風な文章で、「時」も「場」もなく、唐突に出現する「了解要請」

という名詞の使い方です。英語では定冠詞を付けて対応します。The man…です。

★「空を見あげる」は look up at the sky とか gaze up at the sky です。look up to the sky と言うと「空を仰ぎ見る・空を見上げる」という意味にもなりますが、普通は、そのような具体的な意味ではなく respect; revere という意味で使います。

★「トボトボと歩いた」は trudge を使うのが一番いいと思います。ただ、trudge along (the road)とか trudge on とか、何か加えないと英語としてはおかしいです。

● [ながら] (暫時同時)

「男は空を見あげながらトボトボと歩いた」は、「{単位情報} + 暫時同時 (ながら) + {単位情報}」という組み合わせです。この形はこの文章に限らずよく使われますが、その対応は意外と難しいです。基本的には「{単位情報} + 暫時同時(as) + {単位情報}」か、あるいは「本動詞+句」です。「句」に分詞を使って、この場合、The man trudged along looking up at the sky.が可能ですが、分詞構文を使って Trudging along, the man gazed up at the sky.とすることもできます。一見この二つの文章は違うように思えるかもしれません、感じとしてはまったく同じ内容になります。ただし、動詞を look up at から gaze up at に変えてあります。なぜ変えたかというと、Trudging along, the man looked up at the sky.だと「歩いている間に、一度だけ空を見上げた」という意味になるからです。looked の代わりに gazed を使えば「ずっと眺めていた」という感じが出ます。では、Gazing up at the sky, the man trudged along.はどうか。一見これが日本語に一番近いように感じられるかもしれません、本当は違うのです。この場合は「…して (から); …すると」という感じが強くなってしまいますので、少なくとも「…しながら」に相当する自然な英語とは言えません。つまり、分詞構文が「…して (から); …すると」になるか「…ながら」になるかは二つの動詞の組み合わせによって決まるのです。なお、While (he was) gazing up at the sky, the man trudged along.とした場合は、「…している途中で…した」という感じになりますから「ながら」には使えないと思います。while というのは たとえば、While reading the book, I came across an interesting expression.というような場合に使うのです。[ながら] (暫時同時) に接続詞を使うなら as です。結論としては、ここは Trudging along, the man gazed up at the sky.か、あるいは、The man gazed up at the sky as he trudged along.がいいということになります。

■空には星ひとつなく、重く垂れこめた雲が遠いネオンの光を受けて、かすかに赤く染まっている。(8303)

★「空には星ひとつなく」→「空には星ひとつなかった」は No stars were in the sky.でもいいですが、Not a single star was in the sky.とか The sky [It] was devoid of stars.の方が日本語の強さに合います。なお、No stars could be seen in the sky.でも間違いではありませんが、何となく‘探してみたが、星は見えなかった’という感じになります。No stars were to be seen in the sky.の方がまだいいですが、これもやはり‘当然あった方がいいのに’というニュアンスが入りますから、ここでは避けた方がいいと思います。

- 「連体修飾節 + 不定代名詞的体言」 → 「連体修飾節の句化 + 不定代名詞的体言」の技法
「重く垂れこめた雲」は「連体修飾節（重く垂れこめた） + 不定代名詞的体言（雲）」ですから、英語では「名詞(clouds) + 関係詞節(which was hanging low and heavy)」となりますが、英語にはハイフンを使って品詞を変えるという技法(e.g. look good→good-looking)があるので、日本語と同じように the heavy, low-hanging clouds とすることが出来ます。
- ★ 「遠いネオンの光を受けて」は by the distant light of (the) neon signs です。neon signs に定冠詞を付けるかどうかですが、付けないと単に「neon signs という物」ですが、the を付けると「例の都会の neon signs」という感じになります。
- ★ 「かすかに」の感じを出すには faint(ly)です。slightly はあくまでも「わずかに」という程度を表す言葉です。
- ★ 「赤く染まっている」 → 「赤く染まっていた」は were tinged with red とか were tinged [tinted] a faint red とかです。tinge も tint も ‘S+V+O+OC’(tinge[tint] silk green)の構造も可能です。
- 時刻は午前三時過ぎ。 (8303)
 - ★ 「時刻は・・・」は It was…の他に The time was…でもかまいません。
 - ★ 「午前三時過ぎ」は (It was) after three in the morning でもいいですが、これは「もう三時を過ぎていた」という意味にもとれますから、It was past three in the morning. とすれば、「三時過ぎ」という日本語の通りになると思います。それから It was something past three in the morning. とすると、「三時から三時半までの間」という意味がはっきりしますが、この表現はアメリカとイギリスとでは多少使い方が違うかもしれません。
- 都会が一番ひっそりと静まるときだ。 (8303)
 - コンマでつなぐ
- ここは、前の「時刻は午前三時過ぎ」に続くので、主語が同じです。コンマを打って続けるのが賢明です。
- ◆ 現実の時間に関わる‘いつものこと’
 - ★ 「都会が一番ひっそりと静まる（とき）」には quiet とか silent; hushed などを思いつきますが、これらは「音」だけの場合に使うものです。この「ひっそりと静まる」には音だけでなく動きも止まるという感じもありますから、たとえば、all is hushed in the city でもいいですが、the city lies at its stillest and most hushed とするのが一番いいと思います。なお、ここは現実の時間の‘いつものこと’を言っているので、現在時制です。それから、この at の使い方は覚えておくといいと思います。たとえば、Today she was at her most beautiful. (今日は彼女は一段と [とりわけ] きれいだった) のように使います。辞書的に言うと「しばしば最上級とともに用いられる‘極限の at’」です。at one's best とか at the latest (遅くとも) など、よく現れます。
- 「連体修飾節 + 不定代名詞的体言」(都会が一番ひっそりと静まるとき)
 - 「都会が一番ひっそりと静まるとき」は「連体修飾節(都会が一番ひっそりと静まる) +

不定代名詞的体言（とき）」ですから、英語では「名詞(the time/ the hour) + 関係詞節(when the city lies at its silent and most hushed)」で対応することが出来ます。なお、ここでは time より hour の方がちょっと文学的というか poetic な感じになります。

■もう酔っぱらいの姿もない。 (8303)

★「もう酔っぱらいの姿もない」の「酔っ払いの姿」は「酔っ払い」(a drunk)でいいでしょう。「姿」は「もう・・・いない」を強めるための言葉の綾です。したがって、英語でも強めて Not even a drunk (was) in sight. がいいです。なお、こういう種類の文章では was を省くこともあります。他には was[were] no more もおもしろいです。be no more という表現は、普通は、たとえば、The great heroes of the past are no more. (もう昔のような英雄は出てこない) (=They have died out [become extinct].) のように使います。ですから、ここで使うと、ちょっと意識的にしゃれたユーモラスな感じで使っているようになります。

■カタリと音をたて、ゴミ・バケツをあさっていた野犬が逃げていく。 (8303)

● [て] (音・声+順次)

★「カタリと音をたて、・・・した」ですが、「・・・音を立てて・声を出して・・・した」にはほとんど定型と言ってよい熟した表現があります。'With a + 音・声, …'か, '(There was) a + 音・声, and …'です。「熟語本位」と銘打つだけあって、こうした熟した表現は岩波書店の齊藤秀三郎『熟語本位・英和中辞典』が網羅的です。特に氏の前置詞研究に裏打ちされた優れた分類が見られます。たとえば、「with は音響の描写に用いる」という項目を立てて with a crash (ガチャンと), with a bang (ぴしゃっと), with a splash (ポチヤンと) などなどが例示されています。この辞書は 2016 年に CD 付きの新装版が出て、パソコンに入れて利用できます。ところで「カタリ」ですが、こういう音の表現は英語でもなかなか難しいと思います。たとえば, clink は teacup がぶれあう時の音にも使われますが、きれいな音ではなく dull, heavy な音として使います。日本のバケツは、現在はほとんどポリバケツですから、材質から言っても、ここは clatter がいいと思われます。したがって、「カタリと音をたて、…」は With a(sudden) clatter, …か, あるいは(There was) a (sudden) clatter, and …です。

★「ゴミ・バケツをあさる」は search the garbage pails for food とか, forage among garbage pails (for food)です。

★「野犬」は a stray dog でしょう。

★「逃げていく」は ran away でもいいですが、主語がかなり離れているので、何となく動詞を重くして締めくくりたいなら scuttled away でしょう。

●「連体修飾節+不定代名詞的体言」(ゴミ・バケツをあさっていた野犬)

「ゴミ・バケツをあさっていた野犬」は「連体修飾節 (ゴミ・バケツをあさっていた) + 不定代名詞的体言 (野犬)」ですから、英語では「名詞(a stray dog) + 関係詞節(which[that] had been foraging among the garbage pails (for food))」です。なお、「あさっていた」と「逃げていった」の時間差を示すために、ここでは過去進行形が必須です。

■始発の電車が走り出すまでには、まだもう少し時間があった。 (8303)

★ 「始発の電車」は the first train(s)です。tarin は単数でも複数でも構いませんが、複数にした方が自然かもしれません。

★ 「走り出す」は start でしょう。

★ 「まだもう少し時間があった」は There was a little more time…あるいは There was still a while to go…という表現も使えます。

● [(・・・する) までには] は before で。

「始発の電車が走り出すまでには、まだもう少し時間があった」は、before を〔関係性指標〕に使って、There was still a while to go [a little more time] before the first trains started. とするのが一番です。では、There was a little more time for the first trains to start. はどうか。文法的には正しいのですが、習慣として(There was…) for ~ to-Inf. という表現は、何か量的に足りないという場合に使うことが多いのです、たとえば、There was not enough time for me to do it.とか There was not enough money left for us to buy that book. のように。なお、これは、たとえば、I hadn't enough intelligence to understand that book. (=There was not enough intelligence for me to understand that book.) の関係にあります。